



※イラストの指文字は相手から見た形です。

手話も 覚えてみよう

vol.25

○盲ろう者

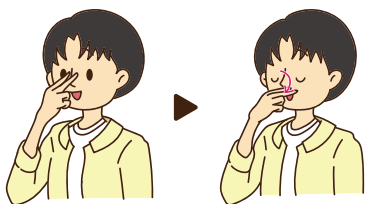
目（視覚）と耳（聴覚）の両方に障がいを持つ人のことをいい、世界的にはヘレン・ケラーが有名です。

日本全国の盲ろう者は、1万4,000人と推計されています。コミュニケーションの方法は、障がいの程度や盲ろうになるまでの経緯によって異なりますが、手話の形を触って読み取る「触手話」や、見え方に合った範囲で手話を表す「弱視手話」、手のひらに指先などでひらがなやカタカナ、漢字などを書いて伝える方法などがあります。

やってみよう！～身近な言葉の手話～

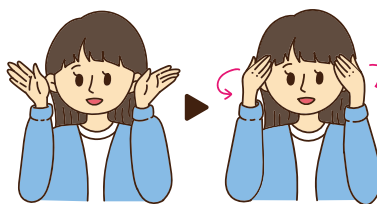
普段使う言葉を手話でやってみましょう ※QRコードを読み込んで、手話の動画を見ることもできます。

目が見えない



右手の人さし指と中指の指先を両目に向け、閉じさせるように下におろし、同時に目を閉じる。

視野が狭い



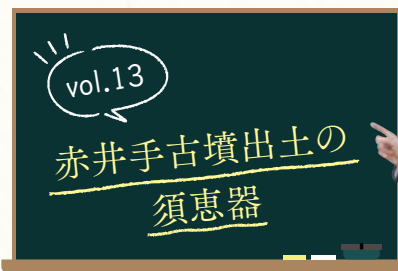
両手の指先を前に向けて両方のこめかみの近くに置き、指先を近づけて狭める。

問い合わせ先 福祉支援課障がい福祉担当 ☎(584)1111(代) 📠(584)1154

赤井手古墳は、福岡平野を北に見下ろす弥生7丁目にあり、現在は公園として整備・保存されています。古墳時代の後期前半（6世紀初頭）の古墳で、昭和54年に市教育委員会が発掘しました。既に盗掘されていましたが、石室には鉄製武器、鉄製農具、須恵器など多種多様な副葬品が残っていました。特に須恵器は、ほぼ完形で副葬時のまま石室の隅にまとまって置かれていました。大型の器台や、朝鮮半島の百済に系譜を持つ瓶、畿内の要素を持つ

奴国の丘歴史資料館 市報DE講義

名誉館長の



問い合わせ先 文化財課整備活用担当 ☎(501)1144 📠(573)1077

子持壺、蓋の付いた脚付壺など、どれも一級品です。さらに、分析の結果、一部の須恵器は、近畿や朝倉地域などから運ばれたと分かりました。これだけ豊富な須恵器を副葬した例は、同時期の福岡平野にはありません。この時期、北部九州では、それまで墳丘の上などに置いた土器を石室の中に納める儀礼が一般化します。赤井手古墳はその代表例です。出土した須恵器は、被葬者像や当時の副葬の様子、技術力の高さ、他地域との交流の広さを示す貴重な資料です。市の誇る宝として、令和7年3月に市指定文化財となりました。



▲子持壺と器台



▲赤井手古墳(石室)